



THE SOUND MAKER

サウンド・メーカー

ジャガー・ルクルトの歴史は、ジュウ溪谷の平穏で昔から変わらない景色と密接に結びついています。そこには、木々が風にそよぐ音や鳥の歌声、勢いよく流れる溪流の音など、自然の音に溢れています。そして冬には辺り一面を深い雪が覆い、静寂に包まれます。

この地の長くて厳しい冬が、この溪谷の象徴となる特別な 2 つの音響の発展に貢献してきました。ジュウ溪谷では寒さのために唐檜の木々の成長が遅いので、産出される木材は非常に優れた楽器の響板に生まれ変わります。その品質は、弦楽器の製作者が何世紀にも渡って探し求めてきたほどです。凍てつく冬の間は室内でとても長い時間を過ごすため、ジュウ溪谷の昔の時計職人達は、複雑なミニッツリピーター機構を搭載した時計の開発や製造に十分な時間をかけることができました。

2020 年、ジャガー・ルクルトは THE SOUND MAKER (サウンド・メーカー) を称え、ジュウ溪谷とミニッツリピーター機構を搭載した時計の素晴らしい伝統にオマージュを捧げます。1 世紀半に渡り培ってきた卓越した職人技を新たな方法で表現します。

時が紡ぐ音

600 年以上、時間の経過は音で告げられてきました。ヨーロッパの人々は、村の教会や市庁舎の塔の時計が鳴らす鐘の音とともに日常生活を送ってきました。

実際、置時計を意味する「clock (クロック)」という言葉は、鐘を意味する古期フランス語の「cloche (クロシェ)」に由来しています(「cloche」は、ラテン語の鐘の音を意味する「clocca」に由来します)。

このような歴史ある塔の時計のミニチュアバージョンとも言えるミニッツリピーターは、電灯が発明される前の時代に、暗闇の中で時刻を知るために発明された、としばしば言われています。必ずしも本当のことではないかもしれませんが、とても素敵な話です。音を鳴らす小さな時計を生み出す真の原動力となったのは、昔の時計職人の革新を求める熱い思いと、ステータスと鑑識眼のシンボルとして身に付けられるものを手に入れたい裕福な顧客の望みでした。

ジャガー・ルクルトの創業者アントワーヌ・ルクルトは時計職人としてだけでなく、より正確かつ小さな単位で部品を測定、加工できる機械の発明家としても、大きく貢献しました。その結果、ジュウ



溪谷は、従来にも増して複雑で小さく、より美しい音色を奏でる、ミニッツリピーター機構を搭載した時計とオルゴールの両方を製造することで有名になりました。

卓越した歴史

時計職人がマスターするのに最も困難でありながらも、最も挑戦のしがいがある複雑機構とみなされているのがミニッツリピーターです。単に腕時計の機能であるだけでなく、ミニチュアの楽器でもあります。このような時計を製造するためには、並外れた器用さの他にも、音を聞き分ける能力が必要です。

ジャガー・ルクルトは 1870 年に初めてミニッツリピーターを製造して以来、200 個以上のミニッツリピーター用キャリバーを開発し、1900 年までに 100 個ほどのミニッツリピーターを製造しました。比較的シンプルなアラームから非常に複雑なグラン・ソヌリやウェストミンスターの鐘の音色まで、あらゆる種類を開発してきました。20 世紀半ばまで、「グランド・メゾン」と称してミニッツリピーターやソヌリを製造する一方で、時計製造業の名だたるブランドの数多くにミニッツリピーター機構を搭載したムーブメントを供給してきました。

ミニッツリピーター機構の構造は基本的に 19 世紀初期から変わっていませんが、ジャガー・ルクルトは、ムーブメントの伝達効率と奏でる音の透明感や美しさの両方を向上させることに絶えず取り組んできました。初期の技術革新には、カテドラルゴング（1870 年）やトリプルハンマー機構（1880 年）があります。1895 年、ジャガー・ルクルトはサイレント・ストライク・ガバナーを発明したことで、伝統的なレバータイプの調速機構に特有の雑音を取り除きました。現在では、その発明が様々に改良されて、ほとんど全てのミニッツリピーターウォッチに使用されています。1900 年、ジャガー・ルクルトは初めて極薄のミニッツリピーターを製造しました。

20 世紀半ばには、社会が変化し、都市生活においてもスポーツにおいても、人々は実用的な機能を搭載する時計をますます求めるようになりました。そこで、ジャガー・ルクルトは自身を持つチャイム機構の卓越した職人技によって、アラーム機構を搭載した腕時計であるメモボックスを開発しました。ミニッツリピーターのハンマーとゴングの機構をメモボックスのキャリバーに使用し、極めて高速に打ち鳴らすことで、繊細な鐘のようなチャイム音ではなく、単調なブザー音を作り出しました。

1950 年に発表され、特徴的な“スクールベル”の音を奏でるメモボックスは、70 年間アラームウォッチの基準であり続けています。長年の間に、ワールドタイム表示やパーキングメーターリマインダーなどの実用的な機能が追加されたモデルが加わりました。また、1959 年には、世界初のアラーム機能付きダイビングウォッチが発表されました。2000 年以降、永久カレンダーやマスター・コンプ



レッサー、ダイビングウォッチ トリビュートシリーズなど、メモボックスは様々な形で再び登場しています。

テクノロジーと伝統の融合

ジャガー・ルクルトがこの壮大なミニッツリピーターの遺産を蘇らせることに取り組み始めた 1990年代中頃から、ジャガー・ルクルトの時計職人もデザイナーも、時計製造の最も貴重な伝統を守り育てていくために、テクノロジーを用いながら音質の基準を再設定することに取り組んできました。

サファイアクリスタルの優れた音響伝送特性を活かした、特許取得済みの「クリスタルゴング」（2005年に発表）は、サファイアクリスタルガラスにゴングが直接溶接されています。また、2年後に発表された四角形のゴングは、ハンマーが打ちつける表面をフラットにすることでより一定でパワフルな音が鳴ります。連結式の“トレビュシェ”ハンマー（2009年に発表）は、その名の由来ともなっている、中世に兵器として使われた「トレビュシェット」（平衡錘投石機）と同じ動作原理を使うことで、ハンマーの打鐘速度と力を改善しました。2014年の極薄のハイブリス・メカニカ 11で導入されたサイレントタイム リダクション機能は、15分単位の打鐘がない場合に生じる、時と分の間に発生する不要な無音状態を防ぎます。

2019年、ジャガー・ルクルトは、キャリバー950に新たにらせん状の形状をした“デュプレックス”ゴングを導入しました。平らなコイル状のゴングを並べるのではなく、2つのゴングをムーブメントの外縁部に沿って1周するように曲げてから上方に曲げ、さらにムーブメント上面の周りに沿って、それぞれ反対方向に半円アーチを描くようにしてゴングをつなげています。このように、ケース内の空間を最大限に活用して、音響共振を大幅に増加させます。

また、打鐘機構の改善に日々取り組んでいるジャガー・ルクルトのエンジニア達は、リピーターを他の複雑機構と組み合わせることにも挑んでいます。最近では、永久カレンダーと多軸ジャイロトゥールビヨン、ウェストミンスターチャイム機構の組み合わせ（キャリバー184）、永久カレンダーと新たなデュプレックスゴングシステムと自動巻の組み合わせ（キャリバー950）、そして、今年の新世代のマスター・グランド・トラディション・グランド・コンプリケーションでは、恒星暦でのカレンダー表示とオービタル・フライングトゥールビヨンの組み合わせ（キャリバー945）があります。

150年間、これらのミニッツリピーターはジャガー・ルクルトの極めて得意な分野でありつづけ、他の伝統的な複雑機構の卓越した職人技を引き立てています。今年、新世代のミニッツリピーターにスポットライトを当て、マニュファクチュールの偉大な伝統を称えるとともに、ジャガー・ルクルトを常に駆り立ててきた革新的な精神を再確認します。



Jaeger-LeCoultre: HOME OF FINE WATCHMAKING SINCE 1833

ジャガー・ルクルトは、メゾンの本拠地をジュウ溪谷の静寂な地に置いていることが、ホームとして、その場所への独特の帰属意識を高めています。まさにこの地こそ、ジュラ山脈の比類なき景色に着想を得ながら、果てることのない「内なる炎」に導かれ、グランド・メゾンの精神が生まれる場所なのです。すべての作業がひとつ屋根の下で行われているこのマニファクチュールでは、時計職人、エンジニア、デザイナー、芸術職人が一丸となって働き、時計に息吹を吹き込みます。揺るぎないエネルギーと、メゾンに属する一人ひとりのコミットメントを日々促している創造の精神が原動力となり、控えめな洗練さと技術的な創造性を培っています。この精神が、1833年以來、1,200以上のキャリアを生み出すパワーの源であり続け、そして、ジャガー・ルクルトをウォッチメーカーの中のウォッチメーカーへと導いているのです。

www.jaeger-lecoultre.com